



バイオCDMO事業部/ライフサイエンス事業部 事業説明会

富士フイルムホールディングス株式会社

2022年1月6日

本資料における業績予想及び将来の予測等に関する記述は、現時点で入手された情報に基づき判断した予想であり、潜在的なリスクや不確実性が含まれております。従いまして、実際の業績は、様々な要因によりこれらの業績予想とは異なることがありますことをご承知おきください。

1 | 新組織体制とヘルスケア部門の中長期業績目標

富士フイルム株式会社 取締役副社長・CLSO バイオCDMO事業部長

石川隆利

2 | バイオCDMO事業部

富士フイルム株式会社 取締役副社長・CLSO バイオCDMO事業部長

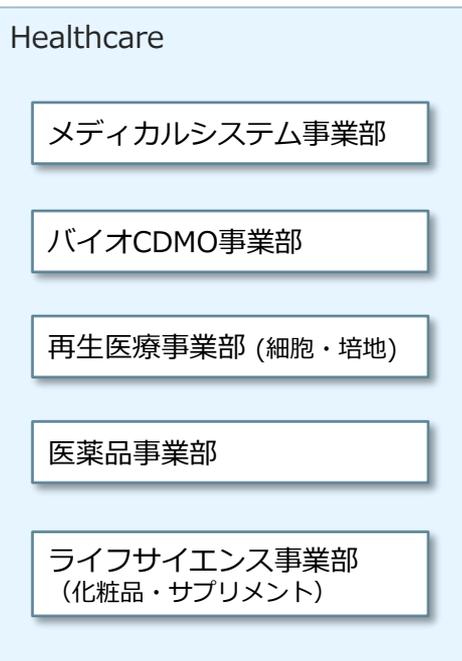
石川隆利

3 | ライフサイエンス事業部

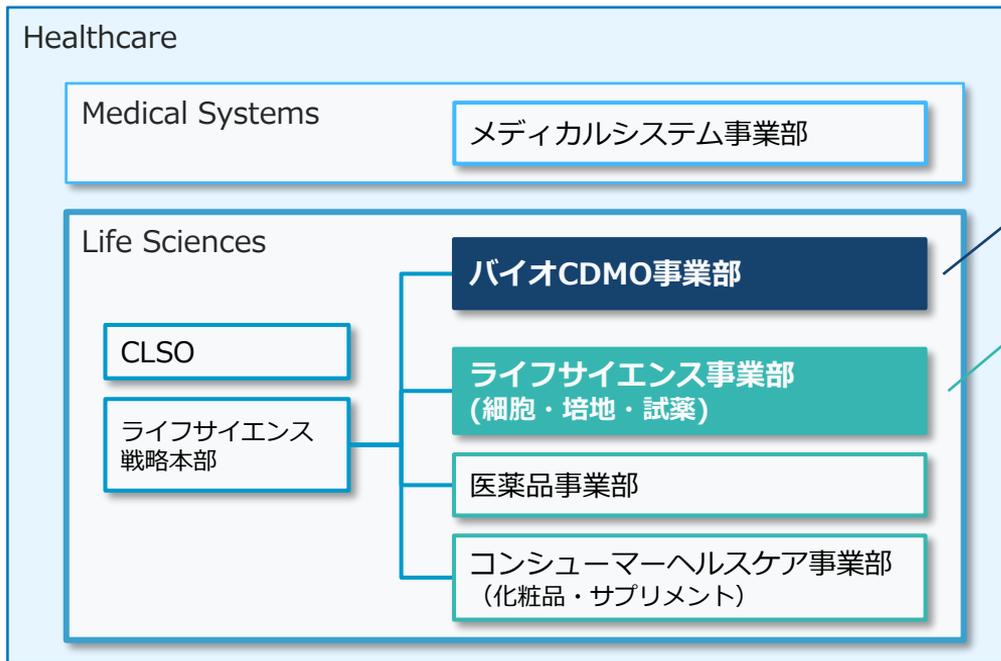
富士フイルム株式会社 ライフサイエンス事業部長 山口豊

- 2021年4月1日 「ヘルスケア部門」を「メディカルシステム領域」と「ライフサイエンス領域」に再定義
- 「ライフサイエンス領域」は、**ビジネスを顧客視点で再編・強化し、バイオCDMOや創薬支援関連ビジネスを重点事業化**
→ **最先端の治療薬創出を“支援”する企業として、ワンストップの価値提供により事業拡大へ**

旧・組織体制 (～2021.3.31)



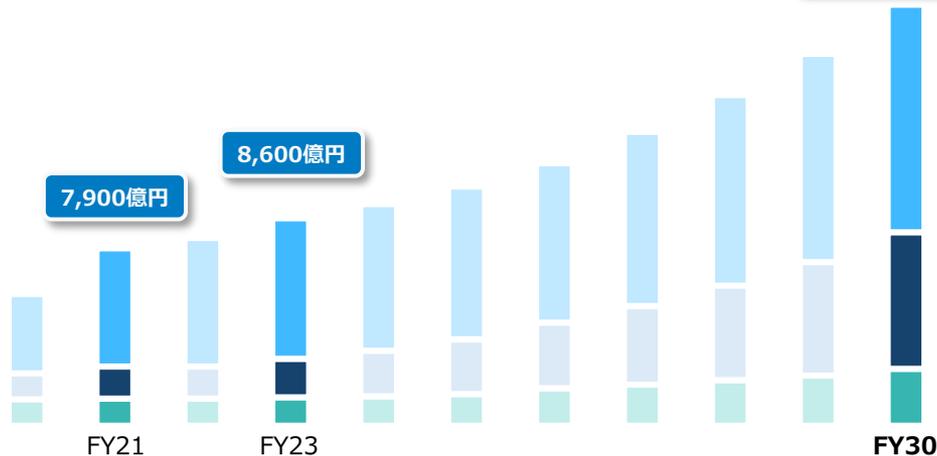
新・組織体制 (2021.4.1～)



「ヘルスケア部門」の中長期業績目標

売上高 → FY30 : 1兆7,500億円

1兆7,500億円

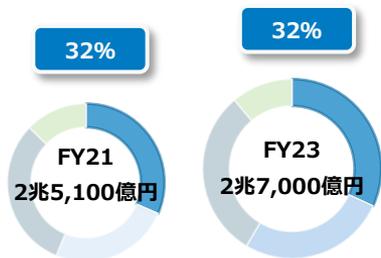


「ヘルスケア部門」	FY30 売上高	FY21-30 CAGR%
メディカルシステム	1兆円	8%
バイオCDMO	5,000億円	16%
ライフサイエンス*	2,500億円	8%

* ライフサイエンス事業部, 医薬品事業部, コンシューマーヘルスケア事業部の合計

富士フイルムHD全体に占める割合 → FY30 : 50%

50%





バイオCDMO事業部



富士フイルム株式会社 取締役副社長・CLSO バイオCDMO事業部長

石川 隆利

2022年1月6日

1. 当社バイオCDMO事業の概要
2. 当社バイオCDMO事業の展望
3. 当社の技術優位性
 - 3-1 幅広いモダリティにおける当社の技術優位性
 - 3-2 業界初の培養～精製連続生産システムの確立
4. まとめ

抗体薬等既存の医薬品に加え、次世代の医薬品の開発進展やワクチン製造需要増加により、CDMOへの委託需要がさらに拡大

- バイオCDMO原薬製造市場の成長は更に加速。

2025年時点で1.3兆円規模に達する見通し（従来予測に対し+3,000億円上方修正、ワクチンを除く）。 主な変化点は以下の通り。

1) 遺伝子・細胞治療薬の開発加速：同市場のCAGRは約30%と成長が加速する見通し（対従来予測+約10%）。

上市品数・開発品数共に増加(治験数:2020年1,220件→2021年1,320件*1)しており、2025年以降に一層の市場拡大が見込まれる。

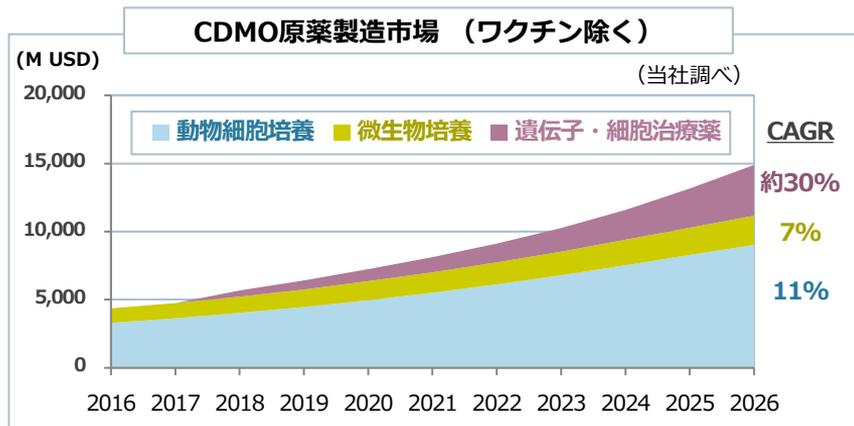
2) 次世代抗体薬の需要増：動物細胞培養セグメントはCAGR11%の高成長が続く見通し（対従来予測+0.5%成長）。

従来抗体薬の堅調な成長に加え、治療効果が高いADC(抗体薬物複合体)やバイスペシフィック抗体など新規モダリティが成長に寄与する。

- ワクチン市場では、COVID-19向けワクチン(2021年市場規模:約6兆円*2)により、大規模な製造需要が発生。製造需要は今後も継続すると見込まれる。

(*1 Alliance for Regenerative medicine)

(*2 evaluate Pharma)



当社は幅広いモダリティかつ小～大スケール製造に対応可能
「ワンストップサービス」で顧客の幅広いニーズに応える

(当社調べ)

		当社	A社	B社	C社	D社
原薬	バイオ	タンパク製剤 (微生物培養)	✓	✓	-	✓
		組換えワクチン (昆虫細胞培養)	✓	-	-	-
		遺伝子治療薬	✓	✓	✓	-
		細胞治療薬	✓	✓	✓	-
		抗体薬 (動物細胞培養)	大型	✓	✓	-
	中小型		✓	✓	✓	-
	ハイブリッド	mRNAワクチン	✓ LNP*製剤化	✓	-	✓
ケミカル	低分子薬	✓	✓	✓	-	
製剤		✓	✓	✓	✓	✓

*LNP：脂質ナノ粒子

主要市場の欧米拠点において、治験薬から上市品、生産プロセス開発から 原薬製造・製剤化・パッケージングまで対応

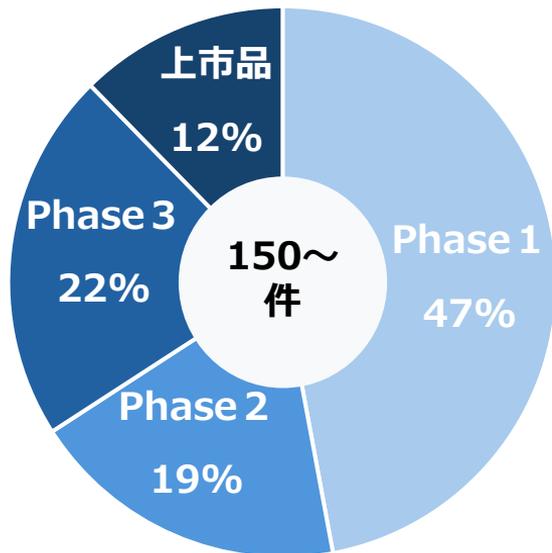
(2022年1月時点)

	ビルンガム 英国	ノースカロライナ 米国	テキサス 米国	ヒルロッド デンマーク	New ボストン 米国	New ノースカロライナ新拠点 米国(2025春稼働予定)
						
サービス						
原薬：抗体薬	✓	✓	✓	✓		✓
原薬：タンパク製剤	✓	✓				
原薬：遺伝子・細胞治療薬	✓		✓		✓	
原薬：ワクチン	✓	✓	✓			
製剤			✓	✓		✓
組立・ラベル貼付・梱包				✓		✓



将来の商用製造に繋がる「治験初期段階(Phase 1, 2)の案件」を多数受託し、持続的な成長を実現する

受託中件数における開発段階ごとの割合 (2022年1月時点)



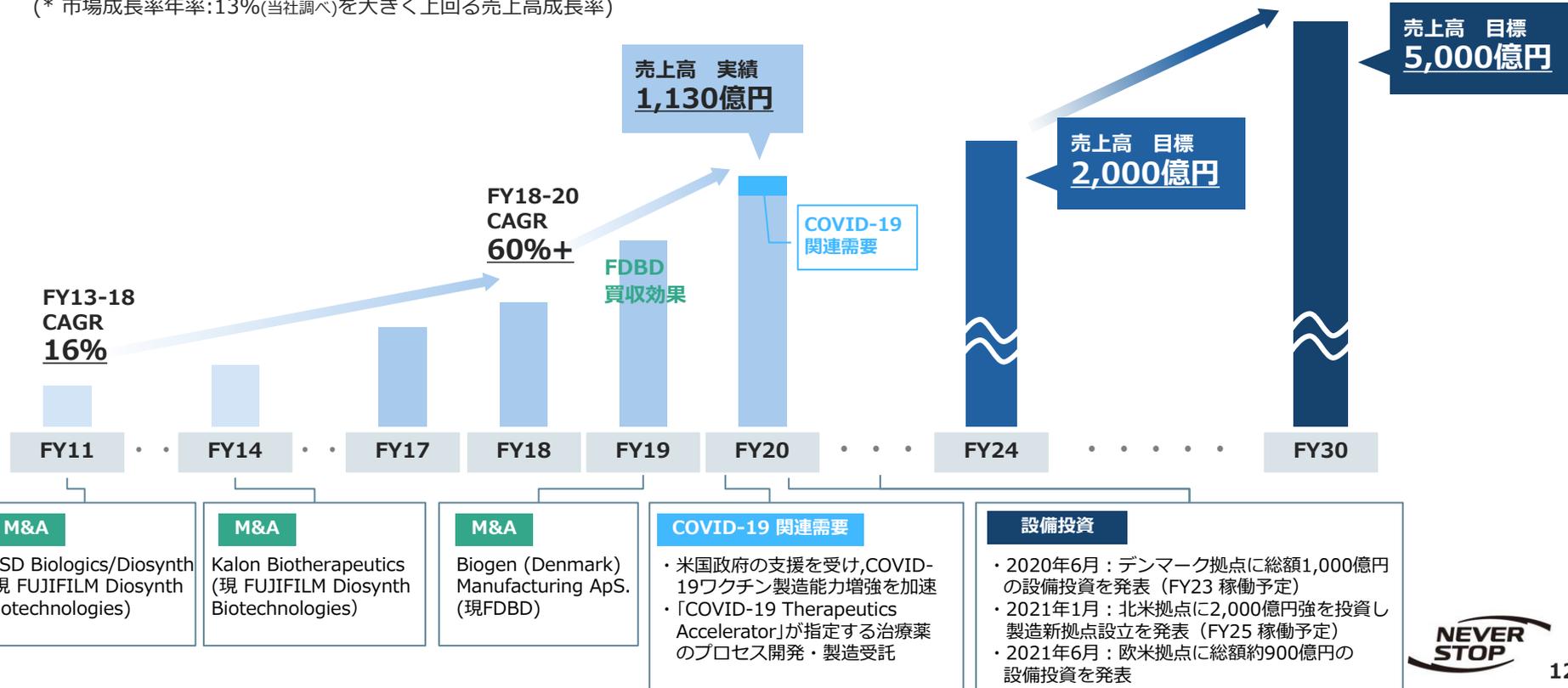
FDBにおける査察受入実績



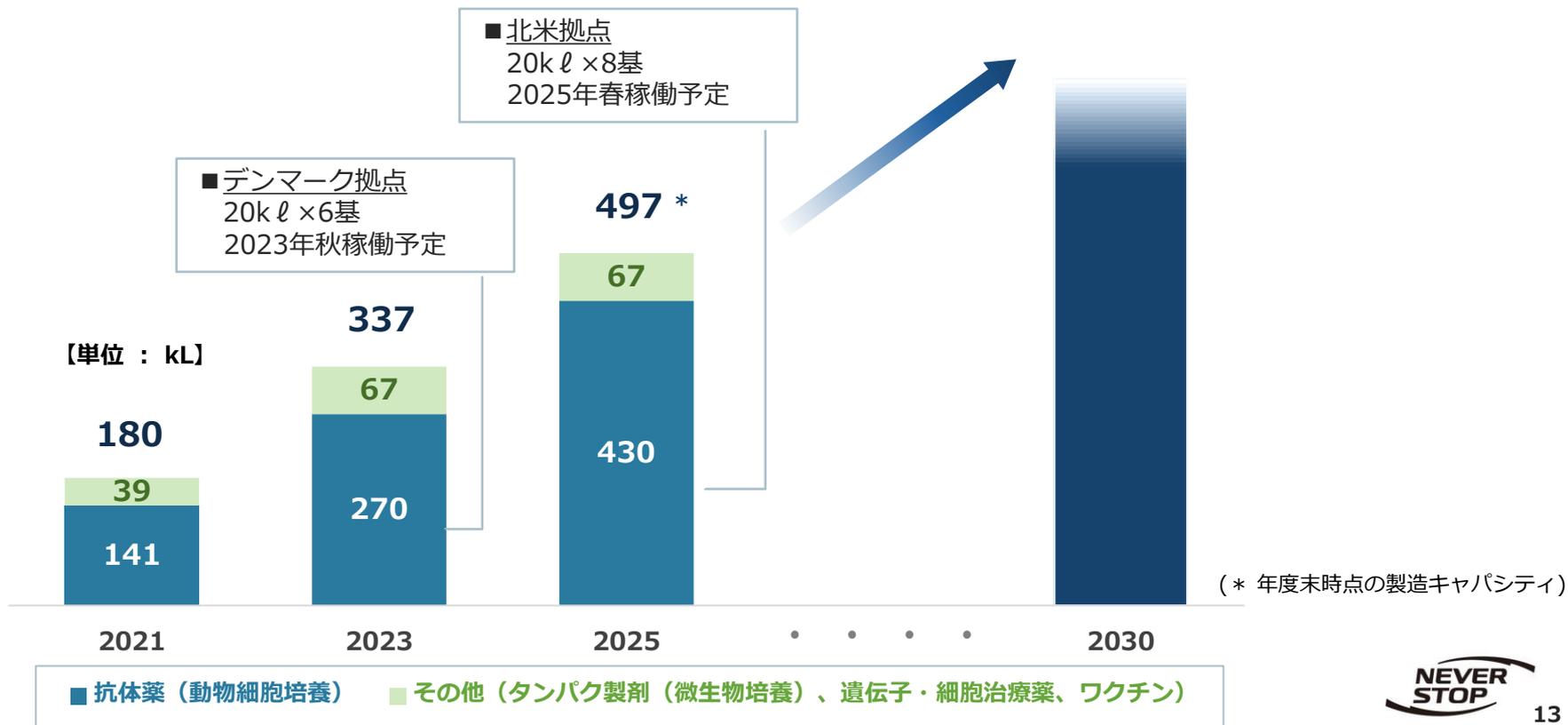
1. 当社バイオCDMO事業の概要
- 2. 当社バイオCDMO事業の展望**
3. 当社の技術優位性
 - 3-1 幅広いモダリティにおける当社の技術優位性
 - 3-2 業界初の培養～精製連続生産システムの確立
4. まとめ

「タイムリーな設備投資」によりCAGR 20%以上* を維持し、FY24:2,000億円、FY30:5,000億円を目指す

(* 市場成長率年率:13%(当社調べ)を大きく上回る売上高成長率)



「市場成長率を上回る速度」で各分野の生産能力を拡充し、飛躍的な成長を実現する



デンマーク工場にて「大規模な原薬・製剤・包装能力増強工事」を実施中*
延床面積：4万㎡ → 6万㎡ へ増床 | 総タンク容量：12万L → 24万L へ拡充

* デンマークで最大規模の投資

- 原薬：2万L 培養槽を

現状の6基 → **12基** へ増設中

- 製剤：新棟を建設し全自動型製造システムを導入
- 包装：組立・ラベリング・梱包装置を追加増強

* デンマーク工場：

- 敷地面積 25万㎡ (サッカー場x35個相当) → 更なる拡張余地あり
- **2025年カーボンニュートラル達成を目指す**



タイム
ライン



米国ノースカロライナ州に、2万L 大型培養槽x8基、製剤・包装ラインをもつ新拠点を建設中
「バイオCDMO製造拠点として北米最大規模」となる見込み

- 原薬：2万L 培養槽を

8基 建設中 → 最大**32基**まで拡張余地あり

- 製剤：全自動型製造システムを導入
- 包装：組立・ラベリング・梱包装置を導入

* 米国新拠点：

- 敷地面積 61万㎡ (サッカー場x85個相当) → 北米最大規模
- 再生可能エネルギー由来電力 100%利用を計画



完成イメージ



起工式*

(*オンライン配信し、SNSを通じて累計1万人以上が視聴)

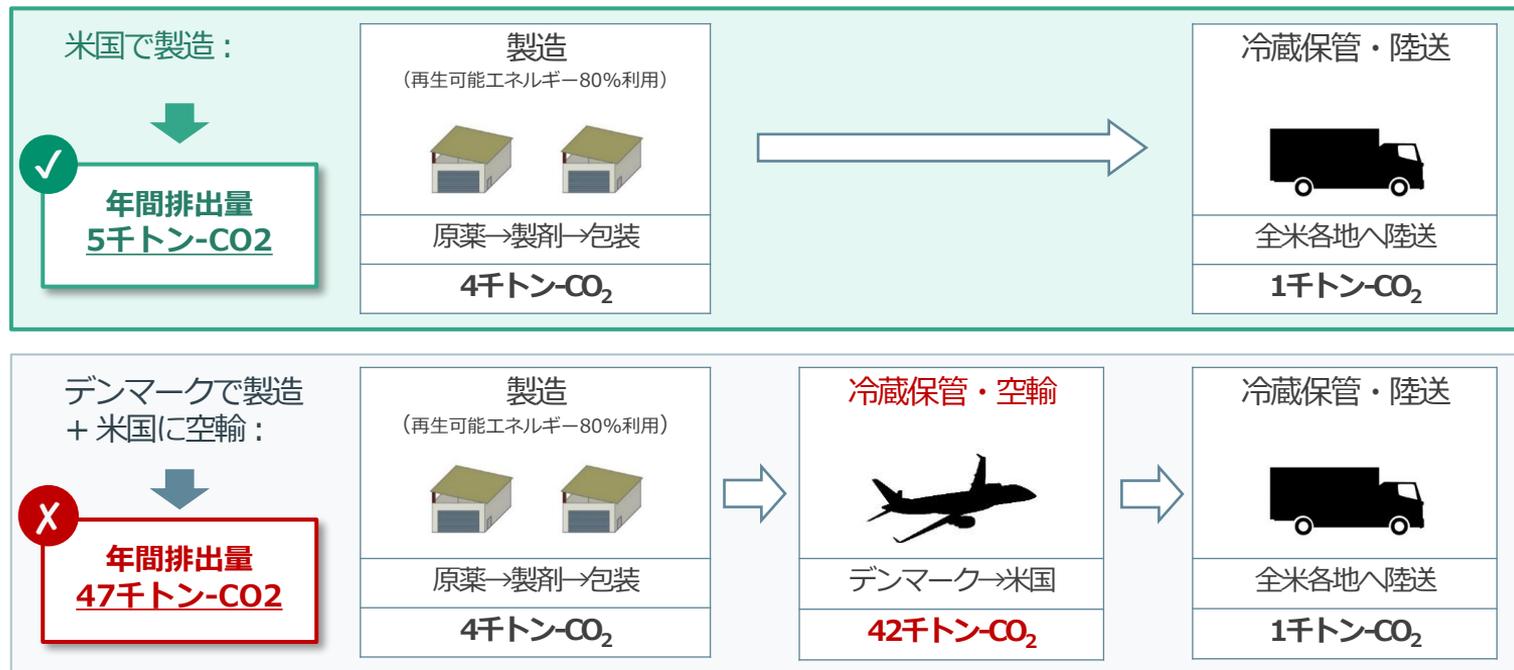
タイム
ライン



「地産地消モデル」の推進によって、バイオ医薬品のサプライチェーンにおける環境負荷を削減する

“米国向け製品供給”に伴うCO2排出量の比較 (当社試算*)

(* 前提条件：“米国向け医薬品”を同等同量製造した際、患者さんの手元に届くまでの年間CO2排出量を比較)



➔ 欧州で製造した場合、冷蔵保管・空輸に伴うCO2排出量が甚大

1. 当社バイオCDMO事業の概要
2. 当社バイオCDMO事業の展望
3. **当社の技術優位性**
 - 3-1 **幅広いモダリティにおける当社の技術優位性**
 - 3-2 業界初の培養～精製連続生産システムの確立
4. まとめ

各モダリティにおいて業界トップレベルの高生産性を有する

(当社調べ)

			当社	競合他社
抗体薬 (動物細胞培養)	生産効率	mAb	10g/L 超 	3~8g/L
		BiAb*	約5g/L	1~2g/L
	細胞株開発期間 (プロセス開発期間)		10週 (34週)	12~18週 (40~48週)
タンパク製剤 (微生物培養)	生産効率	15g/L超 	15g/L超	
	細胞株開発期間	4週	6~8週	
遺伝子治療薬	生産効率	当社従来比3倍 (1.0×10^{11} vg/mL)	-	

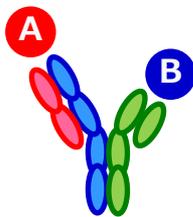
*BiAb: バイスペシフィック抗体

当社はバイスペシフィック抗体の受託生産を開始済
当社独自のプラスミド導入技術により「世界トップレベルの高生産性細胞株構築」に成功（約5g/L）*

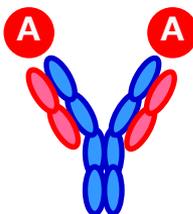
(*2021.12.15 開催の国際学会“Antibody Engineering & Therapeutics”にて発表済)

バイスペシフィック抗体とは

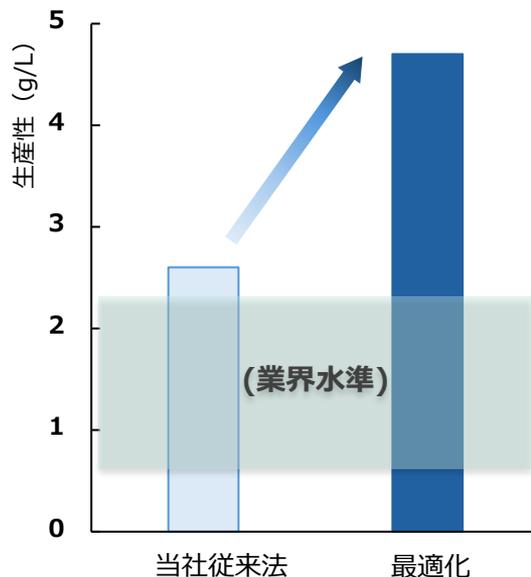
- ・バイスペシフィック抗体
(2つの異なる抗原と結合)



- ・従来抗体 (1つの抗原と結合)



バイスペシフィック抗体 生産実績

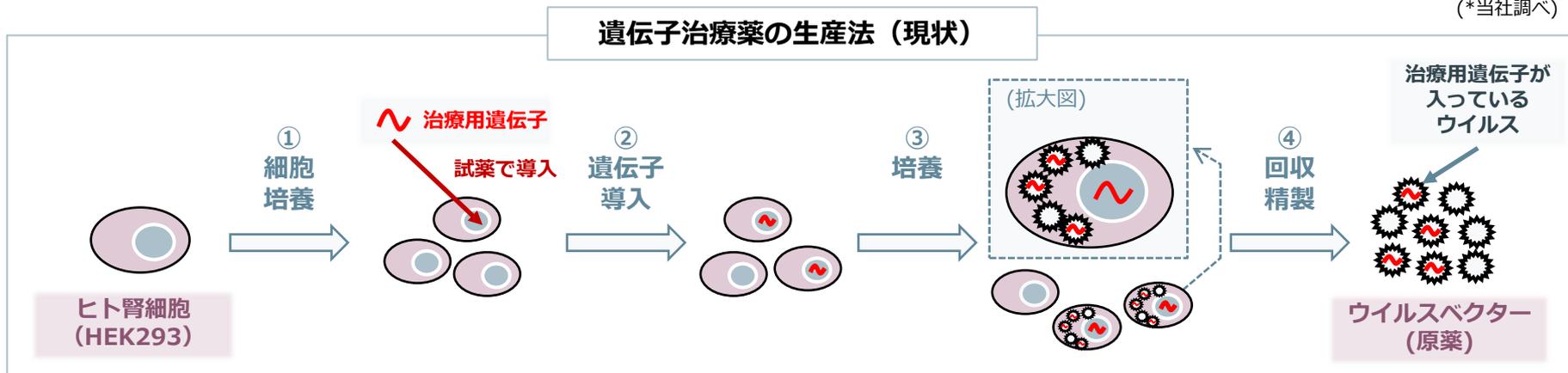


バイスペシフィック抗体薬 市場規模



プロセス技術、ナノ粒子制御技術、AIを用いた解析技術により、従来方法の3倍の原薬生産性*を実現
CDMOとして当社オリジナルの生産プロセスを確立

(*当社調べ)



業界の課題

ヒト腎細胞は凝集しやすく、
高密度培養が困難

現行法では細胞への
遺伝子導入効率が悪い

治療用遺伝子が入っているか
高精度に解析することが困難

当社の
新規技術



培地交換のタイミング等
製造プロセスを最適化



ナノ粒子技術を用いて
遺伝子導入試薬を最適化



目的遺伝子の内包の有無を
評価する独自技術を確立

NEVER
STOP

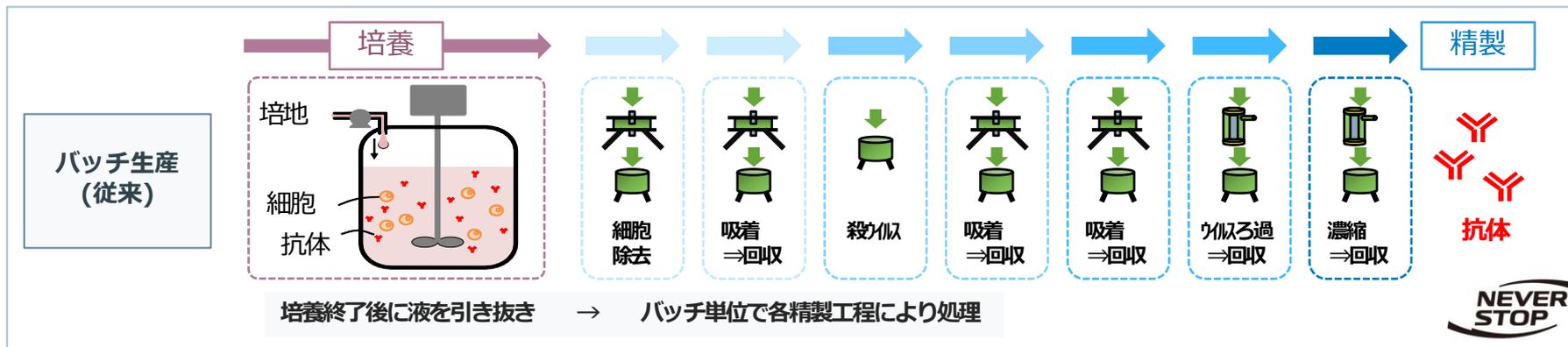
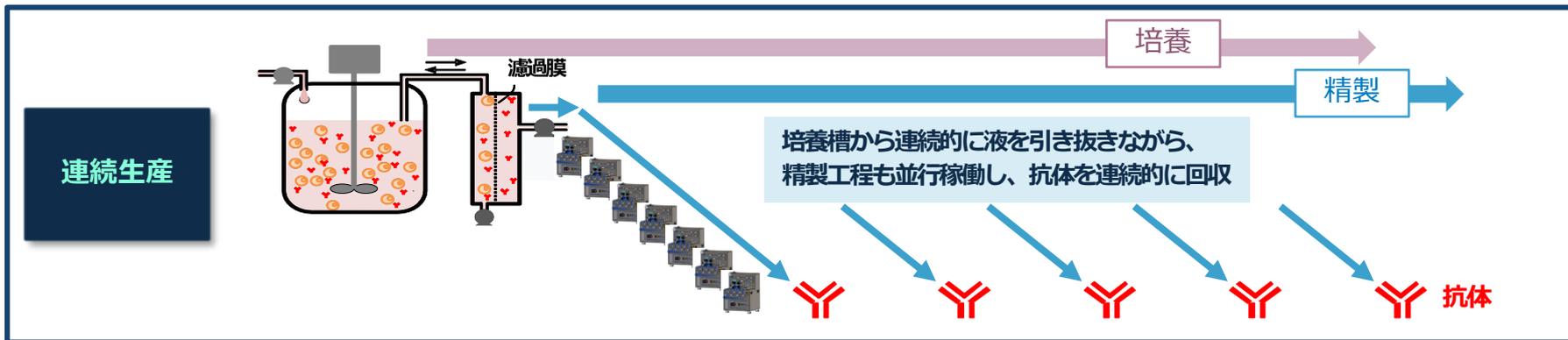
1. 当社バイオCDMO事業の概要
2. 当社バイオCDMO事業の展望
- 3. 当社の技術優位性**
 - 3-1 幅広いモダリティにおける当社の技術優位性
 - 3-2 業界初の培養～精製連続生産システムの確立**
4. まとめ

業界初となる「培養～精製までの一貫連続生産可能な500Lスケールの生産設備」
を自社開発し、実証データを取得（当該設備用のオリジナル培地も開発済）

500Lスケール実証実験



培養槽から連続的に液を引き抜きながら、精製工程も並行稼働し、抗体を連続的に回収する



2023年よりGMP稼働を開始予定 / 製薬企業数社と受託交渉中

	当社連続生産システムの特徴	バッチ生産
品質	<ul style="list-style-type: none"> バッチ生産と比べ高純度となる。 バッチ生産では困難な不安定な抗体を製造可能 	<ul style="list-style-type: none"> 不安定な抗体は製造が困難
生産量	<ul style="list-style-type: none"> 生産日数を調整することで、小～大ロットまで同一設備で製造可能 	<ul style="list-style-type: none"> ロットサイズ毎に異なる製造設備への切り替えが必要
設備投資・製造コスト	<ul style="list-style-type: none"> バッチ生産と比べて、設置スペースを25～75%削減 設備投資額を同25～75%削減 抗体の単位当たり製造コストを同25%削減 (当社調べ) 	<ul style="list-style-type: none"> 製造量に応じたサイズの培養槽への逐次投資が必要
製造技術	<ul style="list-style-type: none"> 「細胞密度自動制御システム」と「連続的な培養状態の計測技術」が必要で自社開発済 自動連続精製装置*においても「自動制御システム」を自社開発済 	-
培地	<ul style="list-style-type: none"> 連続生産に適した培地が必要で、当社は高品質な専用培地を開発済 	-

(*自動連続精製装置や計測技術はバッチ生産にも活用可能)

1. 当社バイオCDMO事業の概要
2. 当社バイオCDMO事業の展望
3. 当社の技術優位性
 - 3-1 幅広いモダリティにおける当社の技術優位性
 - 3-2 業界初の培養～精製連続生産システムの確立
- 4. まとめ**

1

先端技術を含めた多様なモダリティの対応力強化

→ ADCや細胞治療薬等次世代医薬品製造への対応力を強化する

2

各モダリティでの高生産性の追求

→ 抗体薬・タンパク製剤のみならず、
遺伝子・細胞治療薬においても世界トップの生産性を目指す

3

タイムリーな設備投資の継続

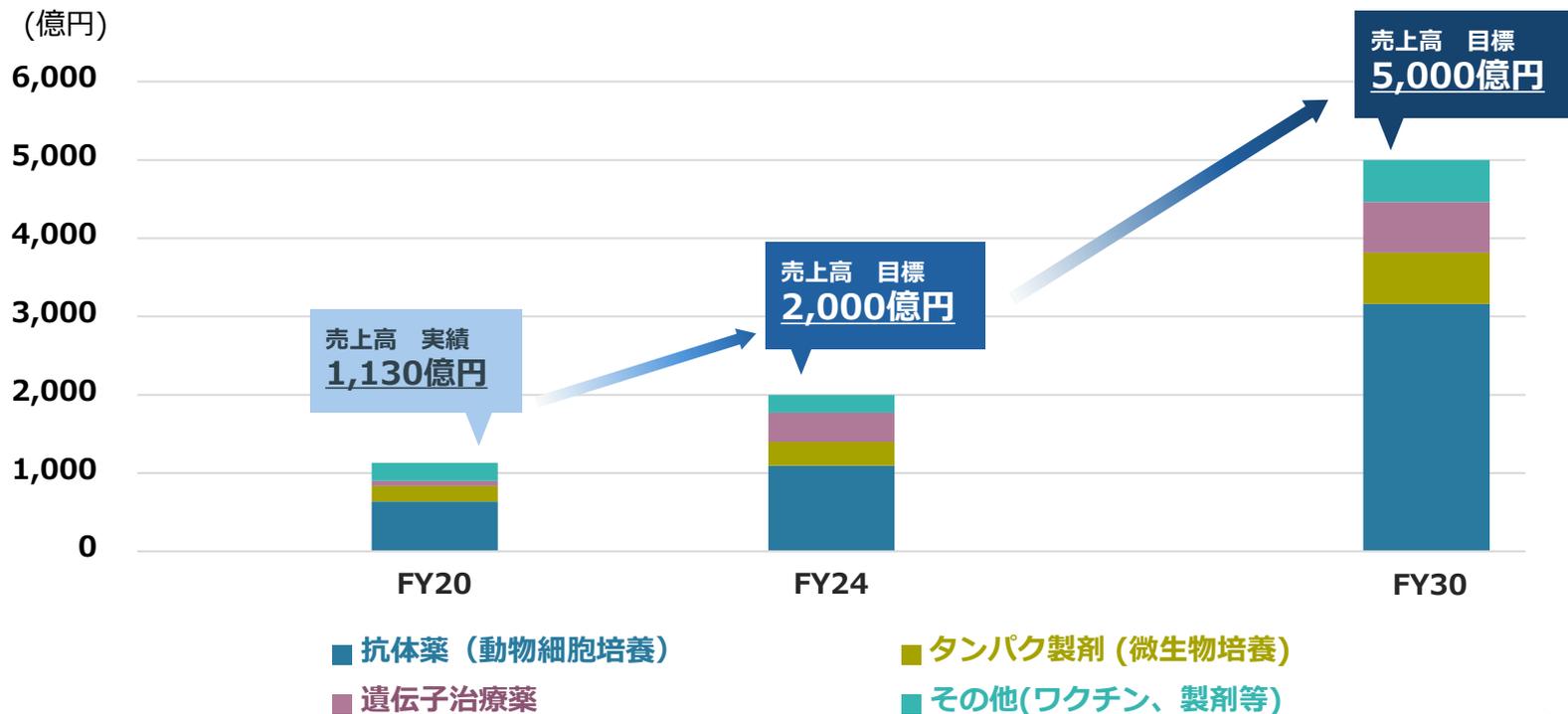
→ バッチ生産と連続生産のハイブリッドでの追加設備投資を検討中

4

環境への配慮

→ 欧米拠点における「地産地消モデル」での医薬品製造に加え、
再生可能エネルギー利用等により環境負荷削減を推進する

「業界最先端の技術開発」と「製造能力増強」の両輪で、
FY24:2,000億円、FY30:5,000億円の売上高を目指す



ライフサイエンス事業部

富士フイルム株式会社 ライフサイエンス事業部長

山口 豊

2022年1月6日

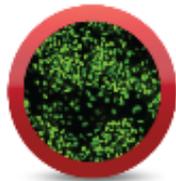
- 1990年 4月 富士写真フイルム株式会社 入社 輸出本部配属
- 1994年 3月 富士写真フイルム株式会社 シンガポール支店
- 2007年 7月 FUJIFILM Electronic Imaging Europe GmbH
- 2014年 4月 ライフサイエンス事業部 (*現・コンシューマーヘルスケア事業部) 事業部長
- 2018年 5月 **FUJIFILM Holdings America Corporation,
GM Life Science Strategic Business Office (現任)**
- 2018年 6月 **FUJIFILM Irvine Scientific Inc. CEO (現任)**
- 2021年 4月 **ライフサイエンス事業部 事業部長 (現任)**
一般社団法人再生医療イノベーションフォーラム 理事

1. 当社ライフサイエンス事業部の事業内容と拠点
2. 『医薬品の研究開発・製造支援事業』 について
3. 『細胞治療プロセス開発・製造受託事業』 について
4. まとめ

新薬の研究開発から生産、細胞治療の領域でソリューションを提供し、 アンメットメディカルニーズへの対応に貢献する

医薬品の研究開発・製造支援 事業

- 創薬支援用ヒトiPSをはじめとする**細胞・培地・試薬**や関連製品の提供を通じて、**効率的な新薬の研究開発から生産のプロセスに貢献**
- 特に培地は、COVID-19ワクチン・治療薬を含めたバイオ医薬品製造での需要増により大きく伸長



iPS細胞



培地



試薬

細胞治療プロセス開発・製造受託 事業

- Fujifilm Cellular Dynamics, Inc. (FCDI)の**iPS細胞をコア**に、富士フイルム独自のエンジニアリング技術やグループ各社が持つ技術・リソースなどのシナジー、協業パートナーとのアライアンスで**効率的な研究開発を推進**
- 富士フイルムグループ各社が持つ技術リソースや設備をプラットフォームとして、**細胞治療薬の開発・製造受託ビジネスを推進**



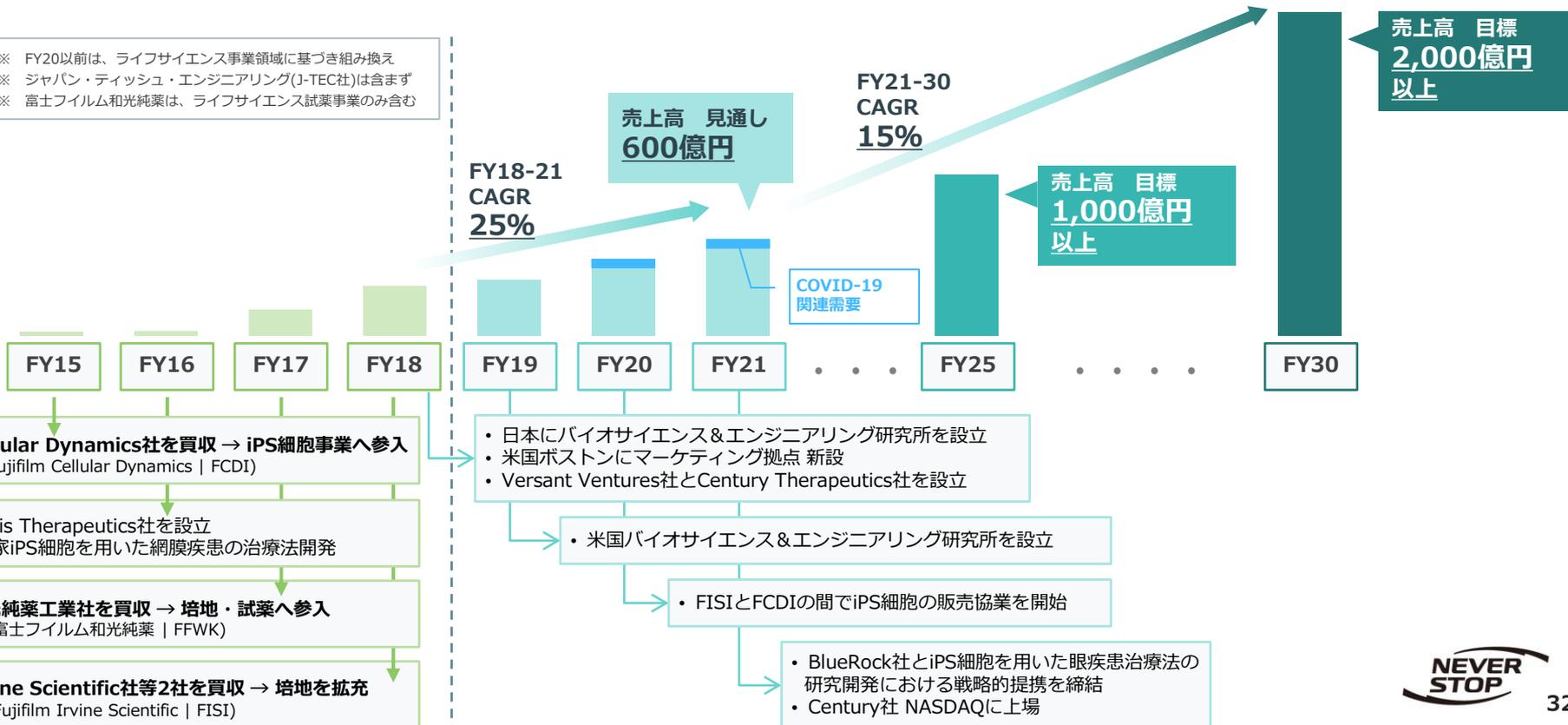
GMP生産施設：i-FACT

(米国ウィスコンシン州マディソン)



FY18までに主要3社の買収完了 / 戦略的な施策を矢継ぎ早に実行し、FY30:2,000億円の売上高目標を目指す

- ※ FY20以前は、ライフサイエンス事業領域に基づき組み換え
- ※ ジャパン・ティッシュ・エンジニアリング(J-TEC社)は含まず
- ※ 富士フイルム和光純薬は、ライフサイエンス試薬事業のみ含む



細胞・培地・試薬関連の技術を幅広く保有する強みを活かし、「グループ会社間のシナジー」を創出していく

FUJIFILM Europe

- 培地の製造・販売
(2021年12月稼働)

FUJIFILM Irvine Scientific (FISI)

- 培地の開発・製造・販売
- iPS細胞の販売

FUJIFILM Cellular Dynamics (FCDI)

- iPS細胞の開発・製造
- 細胞治療のプロセス開発・製造受託

FUJIFILM America (Boston)

- ライフサイエンス戦略オフィス

FUJIFILM China

- 培地の販売・カスタマイズサービス
(2022年3月稼働予定)

富士フイルム バイオサイエンス&エンジニアリング研究所

(日本：神奈川県・兵庫県 / 米国)

- バイオ医療の基礎研究～生産プロセス開発
- 細胞を用いた新たな創薬支援の基盤研究
- 再生医療関連技術のシナジー創出

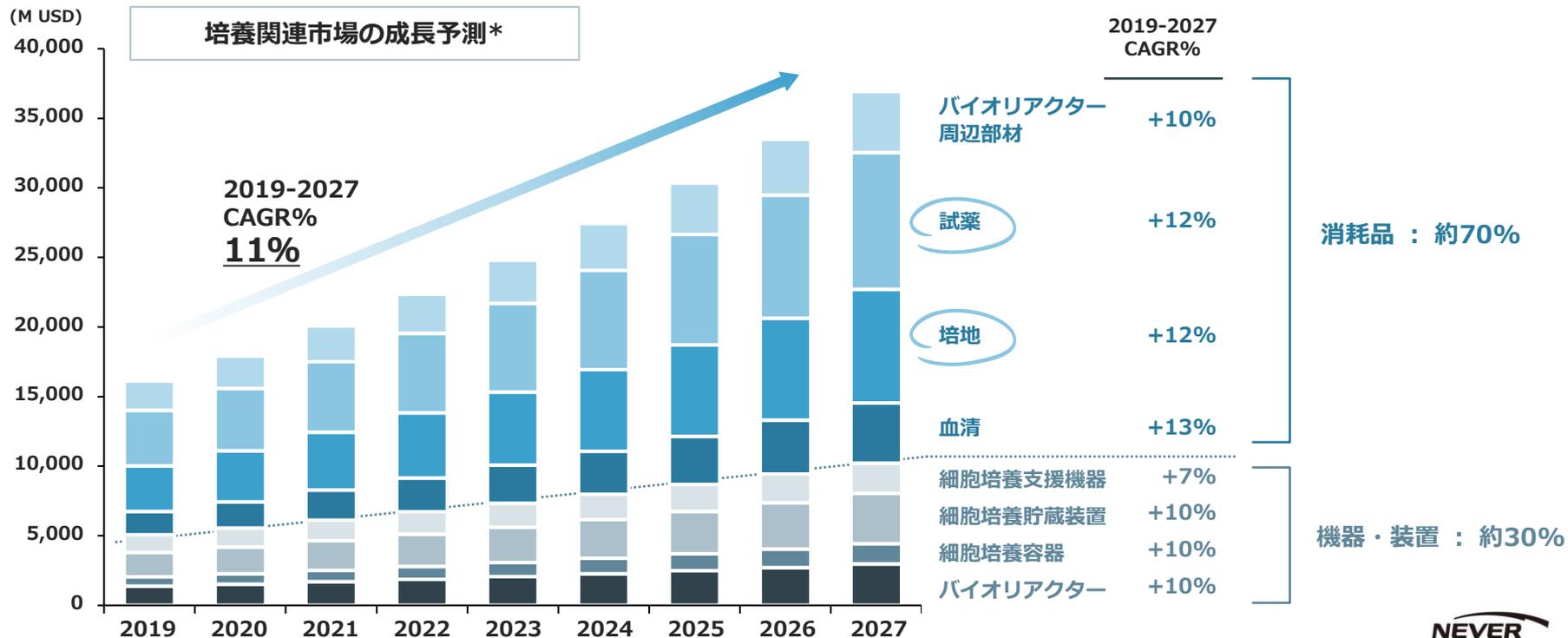
富士フイルム和光純薬 (FFWK)

(埼玉県・愛知県)

- 培地や試薬等の開発・製造・販売

1. 当社ライフサイエンス事業部の事業内容と拠点
2. 『**医薬品の研究開発・製造支援事業**』 について
3. 『細胞治療プロセス開発・製造受託事業』 について
4. まとめ

2019年:\$16.1B → 2027年:\$36.9B (CAGR 11%) の高成長が見込まれる市場
当社の事業領域である「培地・試薬等の消耗品」が市場の7割を占める



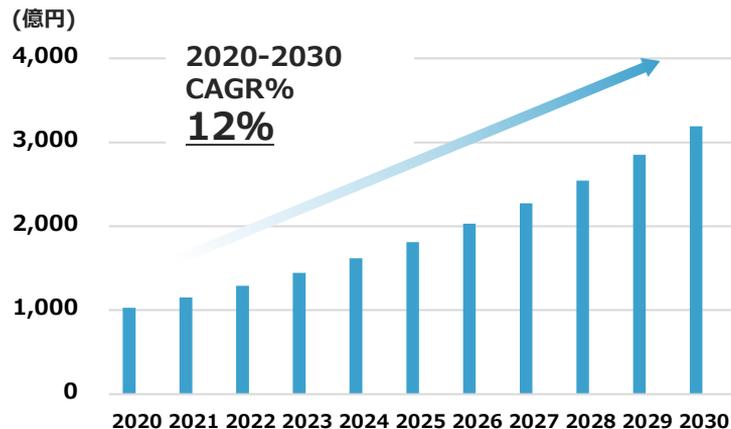
(* Allied Market Research (2020年12月) より当社試算)

当社が注力する医薬品製造用培地(BP培地)は、CAGR 12%が見込まれる成長市場
 当社は、FY30に売上高 1,000億円、トップシェア 30%を目指す

BP培地：市場予測

- ・医薬品製造用(Bioproduction：BP) 無血清培地*は、**CAGR 12%**が見込まれる成長市場

*無血清培地・・・動物由来血清培地に対し、成分(処方)を定義できることにより安全性・生産性・操作性が高く、コマーシャル向け量産製造には無血清培地が使用される

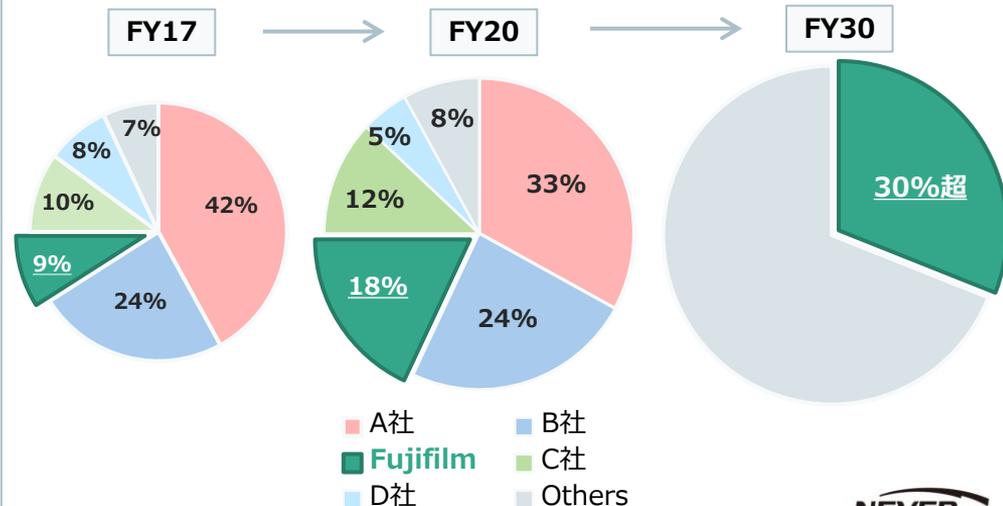


出典：Market Research Report(Nov,2020)
 By MarketsandMarkets Research Private Ltd

BP培地：シェア予測

(当社調べ)

- ・当社は、FY18にFUJIFILM Irvine Scientific (FISI) を買収後、売上高は4倍(CAGR 50%+)、シェアは2倍(9%→18%)へ成長
- ・FY30に売上高 1,000億円、トップシェア 30%を目指す



各部門の連携により強力な顧客サポート力を実現 / 世界の製薬企業TOP20社のうち15社と取引実績

開発

- **顧客ニーズにあわせたカスタマイズ**、少量試作から商業生産までを安定品質でスケールアップ
- FCDIやFDBと協働し、「細胞・培地・培養プロセス」で最適化
- **50年超の実績・トラックレコード**

製造

- **GMP対応の製造設備**を活用して高品質な培地を生産
- 日欧米3拠点での**グローバル生産体制による製品供給**
- 写真フィルムで培った高度な解析技術などを活用した **品質管理(QC)・品質保証(QA)**

販売

- 幅広い用途の培地に加え、バッファーや滅菌注射用水など、**充実の製品ラインアップ**を展開
- **国内外における強固な販売網や、高い専門性を持つセールス部隊**

開発から製造、品質保証までを迅速に実施し、高品質な製品をタイムリーに供給する

顧客ニーズを的確に捉えて研究開発にフィードバック

FISI買収後に約110億円の設備投資を実施し、現在までに生産能力を約5倍に引き上げ

- ・FY21は、米国・日本のさらなる生産能力増強、中国のカスタマイズサービス拠点新設を決定
- ・FY22年以降も、継続的に設備投資を実施する計画



中国(蘇州)
カスタマイズサービス
拠点を新設

- ・細胞の自動培養装置や、培養した細胞の品質・量などを分析する自動解析機器を設置し、細胞培養評価を高精度に行う



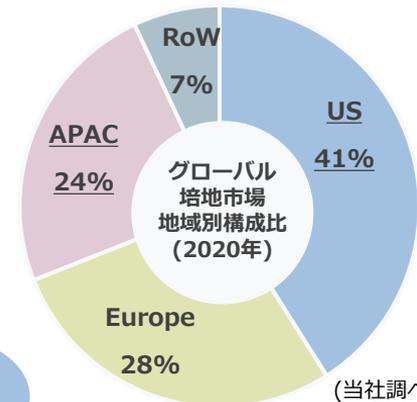
日本(埼玉・愛知)
培地工場能力増強

- ・埼玉工場：原材料保管スペースを拡張、生産人員を強化して粉体培地の生産能力を増強
- ・愛知工場：ワクチン用プロセス溶液の供給を強化する設備投資



米国(カリフォルニア州)
培地工場能力増強

- ・大量生産用の製造装置や倉庫の拡張等
- ・品質システム部門のオフィスとラボ、少量培地製造サービス部門の機能拡張
- ・冷蔵・冷凍倉庫拡張で保管能力3倍化

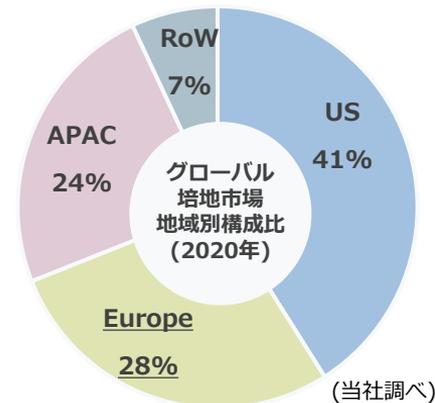


欧州市場に向け、富士フイルム オランダ工場内に培地生産設備を創設（*2021年12月稼働開始）
「日・米・欧 3拠点のグローバル生産体制」を確立し、顧客の創薬・医薬品製造を強力にサポート

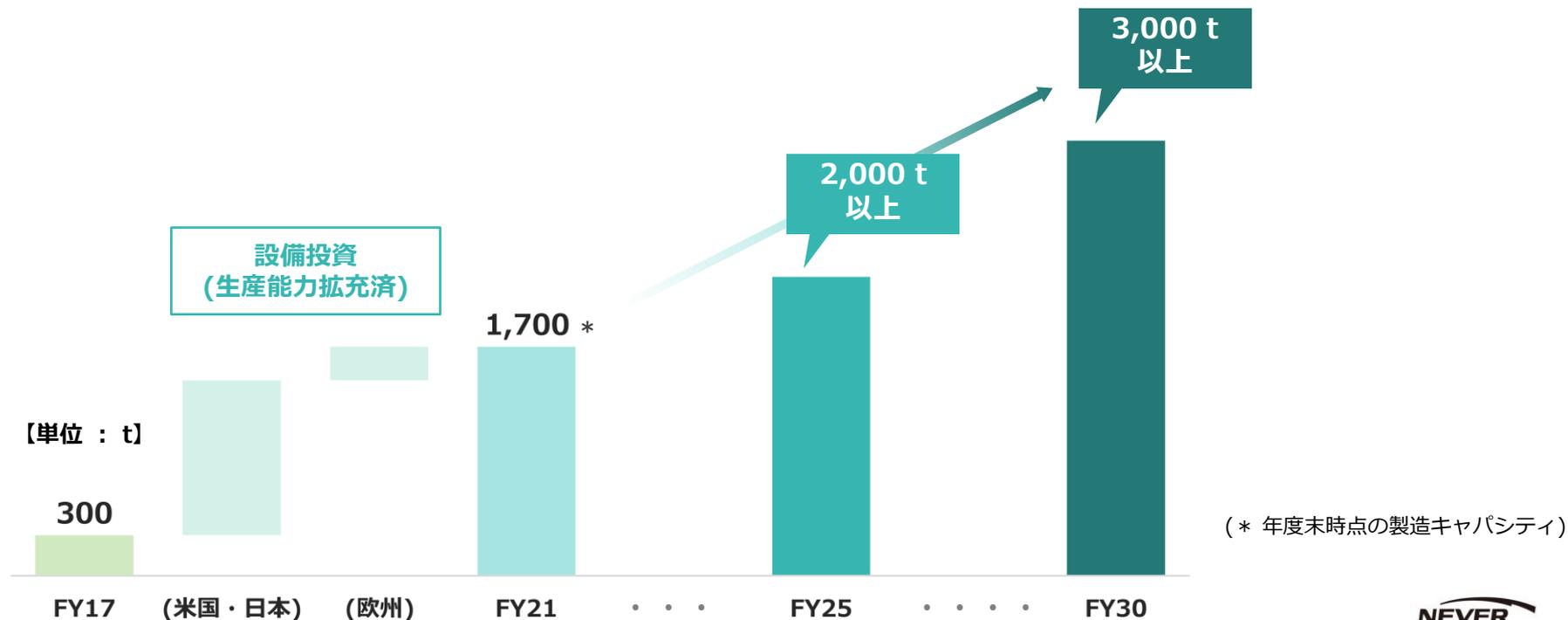


オランダ 培地工場を稼働開始

- 欧州 培地工場の概要
- 延床面積：13,500㎡
- 生産能力：粉体培地 320トン/年, 液体培地 470千リットル/年
- 精緻な製造経験を有する写真フイルムの生産工場を、培地工場に“転換”
- FY22年度中に **カーボンニュートラル**を想定

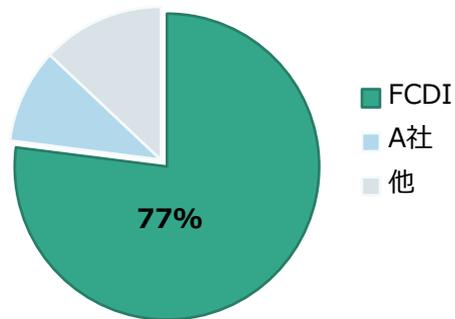


日・米・欧 3拠点で設備投資を継続中 / FY30には「FISI 買収時の約10倍」へ生産能力を拡充

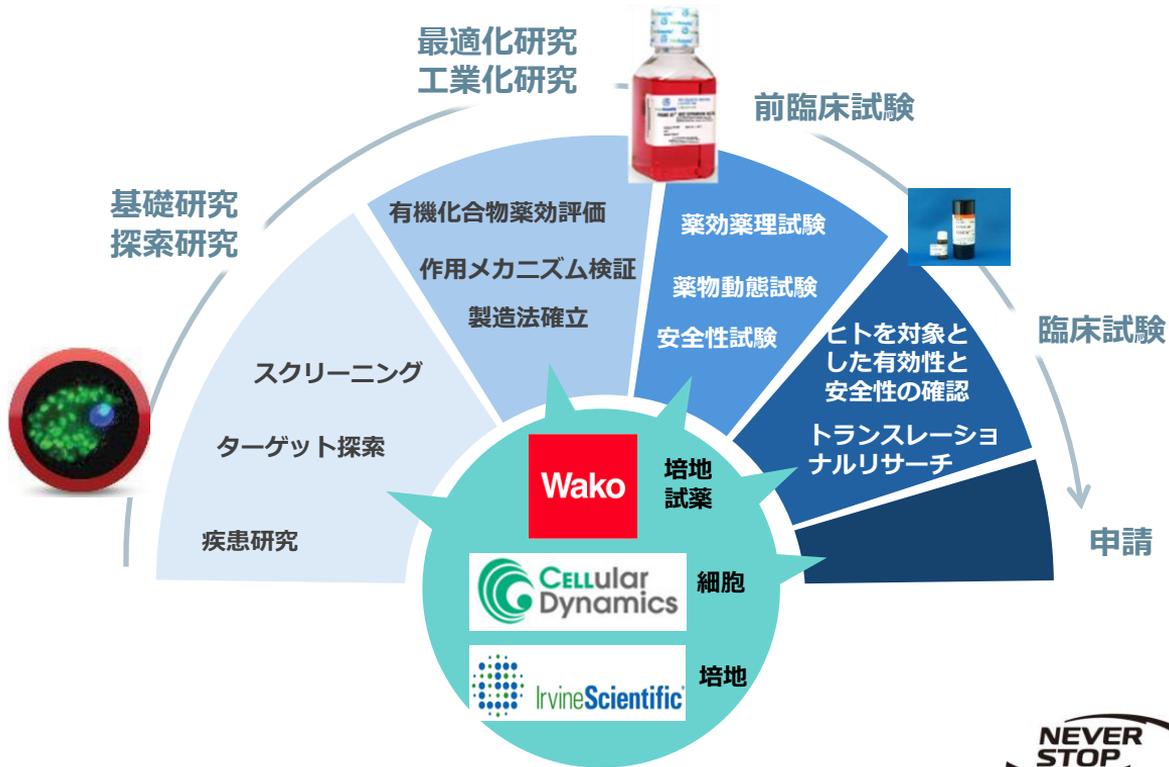
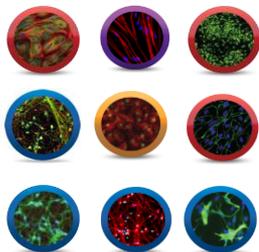


細胞・培地・試薬を商材に、製薬企業やアカデミアでの創薬活動を支援
「顧客のベストパートナー」として、新薬開発のアーリーステージからプロジェクトに参画

iPS細胞製品の世界シェア (*当社推定)
(外部からiPS由来の分化細胞を購入する需要に対するシェア)



FCDIは
心筋や神経系の
細胞を中心に
ラインアップ展開



1. 当社ライフサイエンス事業部の事業内容と拠点
2. 『医薬品の研究開発・製造支援事業』 について
- 3. 『細胞治療プロセス開発・製造受託事業』 について**
4. まとめ

細胞治療はCAGR30%+が期待される成長市場 米国ではiPS細胞由来の細胞治療を開発する企業への投資が1兆円を超え活発化

- グローバルの細胞治療市場(遺伝子治療含む)の成長予測

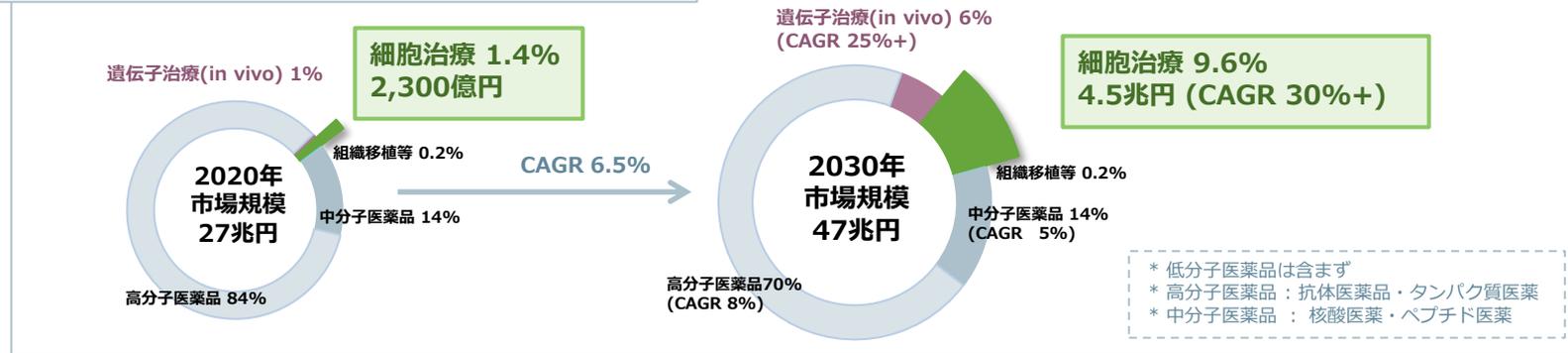
1) 自家→他家、体細胞/体性幹細胞→iPS細胞/ES細胞 へと領域がシフトしながら市場拡大

2) 2020年：2,300億円 → 2030年：4.5兆円* とCAGR 30%+の成長を見込む

* BBブリッジ「2020年度 世界の細胞医薬品開発の現状と将来展望」

再生医療・細胞治療の市場規模とモダリティ構成比*

(* Arthur D. Little Japan調査から当社推定)



- iPS細胞由来の細胞治療を開発する企業は、上場後時価総額や被買収価格が1,000億円*を超える

* 金額情報は2021年12月時点

- CAR-T/NKの開発で先行する Fate Therapeutics社 (時価総額 6,000億円超)
- FCDIとライセンス契約した Sana Biotechnology社 (時価総額 3,000億円超)
- FCDIの提携先でもある BlueRock Therapeutics社 (Bayerが同社の企業価値を約1,000億円と推定し完全子会社化)
- 当社出資先である Century Therapeutics社 (時価総額 約1,000億円)

「iPS細胞・関連特許ライセンスの供与」「GMP施設を活用した開発・製造受託サービス」の組み合わせで、持続的な事業成長を実現できるリカーリング型のビジネスモデルを確立する



iPS細胞
関連特許の実施許諾

- ・初期化特許
- ・分化誘導特許

ライセンス企業からの“継続的な”契約一時金・マイルストーン・ロイヤルティ収入

細胞
関連技術の確立

- ・GMP拡大培養
- ・高品質細胞株

関連技術の確立

細胞治療薬
ベンチャーへの出資

- ・戦略的提携
- ・受託契約の締結

パートナー関係
の強化

プロセス開発・製造受託サービスで事業拡大

出資先からの開発・製造受託



- 2018年にiPS細胞を用いた次世代がん免疫治療薬の開発を目的に、FCDIが出資して設立した米Century社から **iPS細胞由来がん免疫細胞の開発・製造を受託**

*2021年6月 Century社 NASDAQ上場により、FY21に投資有価証券評価益を認識



- 2018年に出資した豪Cynata社から **2021年12月にGvHD*等の治験薬製造受託契約を締結**

* GvHD (Graft versus Host Disease)：移植片対宿主病。ドナー（臓器提供者）の臓器が、免疫応答によってレシピエント（臓器受給者）の臓器を攻撃することにより引き起こされる症状の総称。

自社発パイプラインでパートナーと連携して開発



- 独バイエル子会社の米BlueRock社と2021年5月にiPS細胞を用いた眼疾患治療法の **研究開発における戦略的提携に合意**

* 3件の網膜疾患治療プログラムの開発に関して、契約一時金(30MUSD)、研究開発および治験薬製造の一部にかかる資金(最大40MUSD)を受領

* 開発および販売の進捗に応じたマイルストーンと、10%前後の販売ロイヤルティを受け取る権利を有す

受託拠点のGMP生産施設



Innovation Facility for Advanced Cell Therapy



1. 当社ライフサイエンス事業部の事業内容と拠点
2. 『医薬品の研究開発・製造支援事業』 について
3. 『細胞治療プロセス開発・製造受託事業』 について
- 4. まとめ**

1

研究開発支援 事業の強化

→ヒトiPS細胞を用いた創薬スクリーニング・薬理試験での活用の拡充をフックに、製薬企業やアカデミアへ「細胞・培地・試薬を合わせたソリューション」の提供を推進する

2

培地 事業の飛躍的な成長

→ 継続的な設備投資により「日・米・欧 3拠点のグローバル生産体制」を確立
→ 顧客ニーズに対応したカスタマイズ培地の開発等により、
医薬品製造用 無血清培地において、FY30にトップシェア 30%を目指す

3

細胞治療プロセス開発・製造受託 事業の拡充

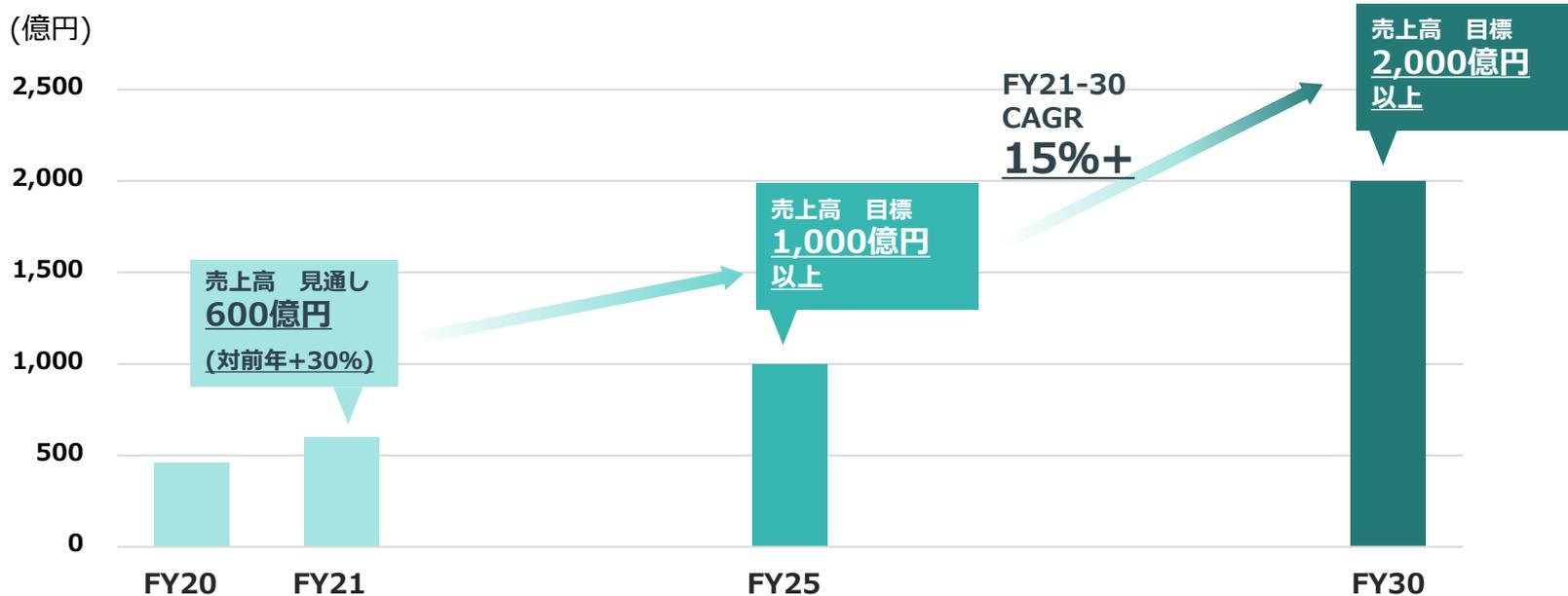
→ 「iPS細胞・関連特許ライセンスの供与」「GMP施設を活用した開発・製造受託サービス」により、持続的な事業成長を実現できるリカーリング型のビジネスモデルを確立する

4

環境への配慮

→ 3拠点における培地の製造~供給(「地産地消モデル」)に加え、
製造施設の再生可能エネルギー利用等により環境負荷削減を推進する

BP培地の成長投資をテコに、CAGR 15%以上の事業成長へ、
FY25 : 1,000億円以上、FY30 : 2,000億円の売上高を目指す



FUJIFILM
Value from Innovation

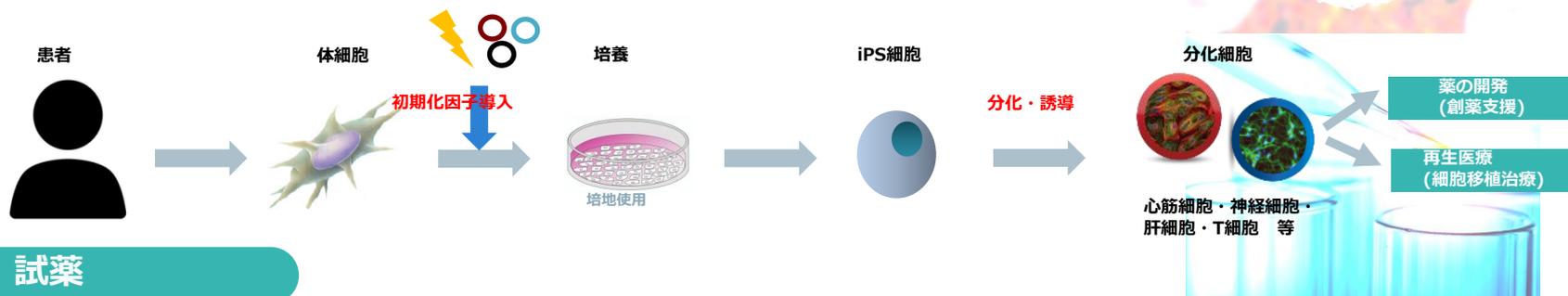
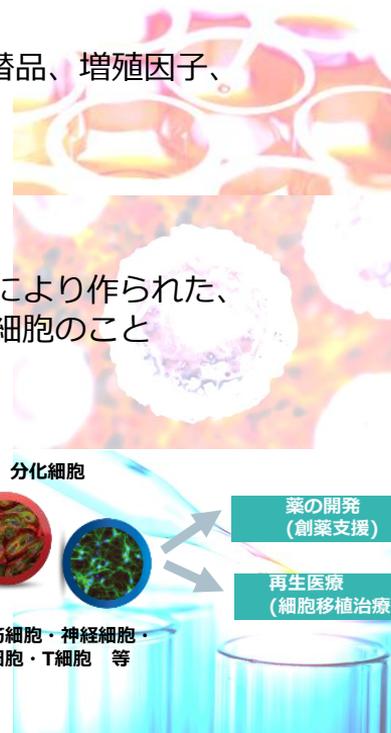
培地

- 微生物や細胞の培養のために用いる、養分などを含む液状や固形の物質
- 培地は、基礎培地[アミノ酸、糖類、脂質、ビタミン、塩類]と、添加物[血清 or 血清代替品、増殖因子、その他]から構成され、多種類の原料を調合して製造

iPS細胞

(iPS=induced pluripotent stem)

- 人間の皮膚や血液由来の体細胞に、少数の初期化因子と呼ばれる遺伝子を導入することにより作られた、様々な組織や臓器の細胞に分化する能力とほぼ無限に増殖する能力をもつ人工多能性幹細胞のこと



試薬

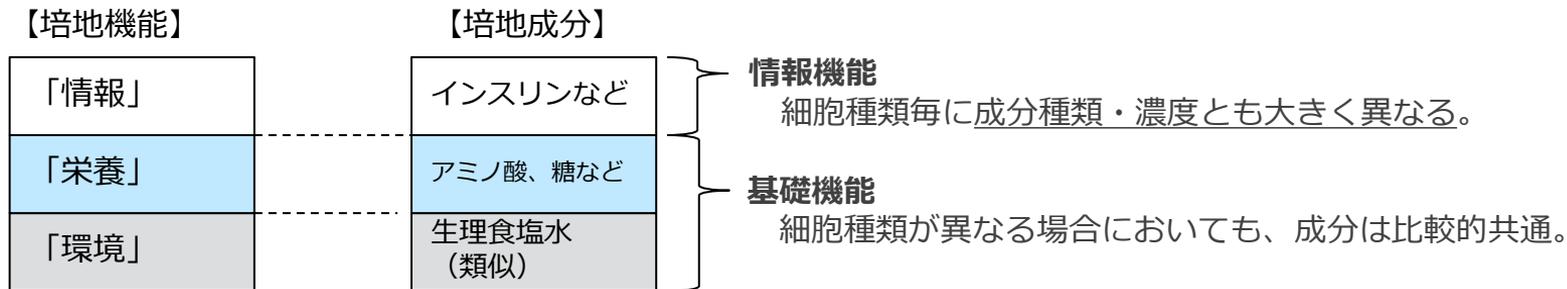
- 「試験研究用薬品」のことで、「化学的方法による物質の検出もしくは定量、物質の合成の実験または物理的特性の測定のために使用される化学物質」(化学物質規制法)
- 生化学研究用試薬、遺伝子工学研究用試薬、免疫研究用試薬に代表されるライフサイエンス関連試薬がある

■ 培地とは

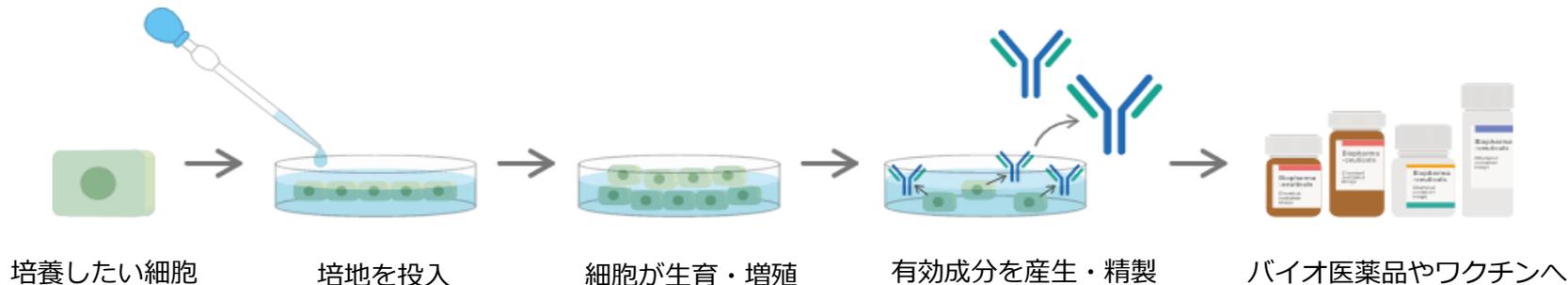
細胞育成と細胞から産生される最終目的物の生産を実現するために不可欠な重要原料。

「環境+栄養+情報」を細胞に提供する機能を持つ。

人それぞれ味に対する嗜好があるように、細胞や細胞の生産物別に最適な組成が異なる。



培養プロセス



A person is running away from the camera on a dirt path that winds through a dry, grassy landscape. In the background, there are mountains under a clear blue sky. The sun is low on the horizon, creating a lens flare effect. The overall mood is one of perseverance and achievement.

NEVER STOP

Achieving Continual Growth